

注口土器
ちゅうこうどき

注口土器とは、細い管状の注ぎ口の付いた縄文土器です。現代のヤカンや急須に似た形をしています。同じように液体を注ぐために用いられたものです。

縄文土器は、鉢のような形をしたものが一般的ですが、注口土器は縄文時代後期（約4000年前）になって、日本各地で盛んに作られるようになります。上の写真は糸野地区の糸野遺跡から、下の写真は清水地区の西原遺跡から発見されたもので、縄文時代後期の土器と考えられます。有田川町内で発見されている注口土器はこの2つのみです。

注口土器は、ひとつの遺跡から発見される点数が非常に少ないこと、美しい文様を施したもののや、丁寧に作られたものが多いことから、祭りの時などに使用される特

別な土器であったと考えられています。

糸野遺跡・西原遺跡の注口土器を見ると、土器の底や表面には煤は付着しておらず、火にかけてような痕跡はありません。このことから液体を沸かすのに用いたものではなさそうです。注口土器でどのような液体を注いでいたかは明らかになっていませんが、果実酒という説が有力です。

この2つの注口土器は、地域交流センター（ALEC）の資料展示室で見学することができます。ご来館の際は、縄文時代の人々の特別な思いが込められた注口土器をご覧ください。



糸野遺跡出土の注口土器（高さ 12.5 cm）



西原遺跡出土の注口土器（高さ 17 cm）